特集：東京地域グループから広がる新しいつながり

筑波大学附属図書館クラウドファンディング：あるプロジェクトチームメンバーが考えたこと

松野　渉

今日の大学図書館においては、運営費・資料費の確保が喫緊の課題のひとつとなってしまっている。この事は本稿読者の多くの方も既に実感を伴ってご存知の事かと思われる。そういった現状において、大学図書館による自己資金確保の手段の一つとして、特定の目的の為、主にWebを介して広く寄附を募るクラウドファンディング（以下、CF）という手法が注目を集めている。

今回、機会を頂き5月20日（土）に実施された大学図書館問題研究会東京地域グループの例会にて筆者が勤務館にて関わったCFプロジェクトについて報告させて頂く事となった。恥ずかしながら大学図書館問題研究会の例会に参加するのは今回が初めてだったのだが、運営委員の方によれば、平時の例会よりも参加者数が多かったようで、大学図書館におけるCFへの注目度の高さを改めて思い知った。本稿は、当日の約40分の口頭報告を紙面にまとめたものである。ただし、紙幅の都合上、当日の全内容を網羅した記事ではない事を予めご了解頂きたい。

「クラウドファンディング」とはCrowd（群集）とFunding（資金調達）を組み合わせた「不特定多数からの財源・資金調達」を示す用語である。近年、CFが大きく注目を集める理由の一つとして、プロジェクト立ち上げ・達

成を支援するCF事業者の出現が挙げられるだろう。

ところで、大学もまた運営費の確保に苦慮し、外部資金獲得が広く推奨されているのは周知の通りである。こういった中、筆者の勤務大学は2016年11月より民間CF事業者株式会社READYFOR（以下、RF）との業務提携を行っている（国立大学法人とCF事業者との業務提携は国内初）[1] [2]。この提携に際して、附属図書館内で筆者を含むプロジェクトチームが組織され、附属図書館によるCFプロジェクトの実施が決まった。

CFプロジェクトを実施する際に、最も重要な要素は何であろうか。言うまでも無くそれは趣旨、「何の為に資金を集めるのか」であるが、加えて同程度に重要なのは想定される支援者、「誰が私たちを助けてくれるのか」という事である。前述の通り今日の大学図書館は資金難に直面しており、様々な面で資金が不足している事が多い。ただ、CFにおいては性格上、より多くの人が「支援するに足る」と感じる事業をプロジェクトの主眼とするべきであり、その想定を怠ると期待通りに寄附が集まらない可能性が高い。支援者あってのプロジェクトであるから、立ち上げ時には趣旨の設定と同様にその像について検討する必要性が大きいのである。

そうした観点からチーム内で検討を行った結果、勤務館でのプロジェクトは「紙の本」をキーワードとする事とした。勤務館においては資料購入費のかなりの割合を電子資料費が占めており、紙資料の購入費は相対的・絶対的に減少の一途を辿っている。この点を踏まえ、「紙の本の魅力」「学生時代に多くの紙の本に触れる必要性」にフォーカスしたストーリーは寄附を広く募る際に比較的受け入れられやすいものとなるだろうという考えが趣旨設定の基底となっている。

プロジェクトの趣旨が定まれば、その趣旨を、支援を依頼するストーリーとともにCFのプラットフォーム上に公開する。本プロジェクトにおいてはストーリーの構築や寄附を募りやすいWeb上での見せ方などについて提携先のRF担当者から多大な協力を得た。

そのようにして構築された本プロジェクトは2017年1月26日から寄附の募集を開始した[3]。本プロジェクトは我々やRFの予想を大幅に上回る形で多くの方々から多額の寄附を頂き、結果的に当初の目標とした寄附金総額300万円は公開後1週間も経過せずに達成する事となった。

この要因の一つとして、筆者はWebでの情報拡散の影響が大きいと考えている。本プロジェクトは公開直後からTwitterやFacebookをはじめとしたWeb上での発信を精力的に行った。大学図書館におけるCFという事例の目新しさも手伝ってかこれらの発信がWeb上で積極的にシェアされ、本プロジェクトが短期的にとは言え所謂「バズった」状態となった。これにより、平時には我々から発信した情報が届かない層にまでプロジェクトの報が届き、より広く寄附を募る事が出来たのである。

そのようにして順調に滑り出したプロジェクトは最終的には3月末の終了までに総額500万円以上の寄附を頂戴する事となり、大きな成功を収めた。尚、支援者から温かな応援を多く頂戴し、プロジェクトチームメンバーに限らず多くの館員の励みとなった事も申し添える。現在プロジェトチームでは寄附金を用いて購入する資料の選定や支援者に対する支援額に応じたリターンの準備等に追われている段階である。

プロジェクトに一区切りがついて実感する事は、プロジェクト業務における土台作りの重要性である。ここまで述べてきた通りCFは短期的かつ成果ベースが基本形であり、これは従来の図書館業務とはかなり趣が異なる部分が大きい。プロジェクトに主体的に取り組むメンバーをどのように選出するのか、意

思決定はどこまで委ねられるのか等、開始前に館内でコンセンサスが必要な事柄は多いと本事例を通して実感した。一方で、CFに限らずプロジェクト型の業務にはスピード感が求められる場合が多く、メンバー選出やコンセンサスに多くの時間が割けない場合が多いのもまた事実である（事実今回もそうであった）。大学運営において明確な成果やエビデンスが求められる傾向は強まっており、大学図書館運営においてもCFのようなプロジェクト型業務に取り組む機会は増えていくと考えられる。スピード感と成果の両方が求められるプロジェクト型業務に備えて、プロジェクトが発生した際の全館のバックアップ体制について事前に明確にしておく事が今後重要になってくるのではないだろうか。

もう一点、まとめに代えて強調したいのは「CFは『Webで何かしら発信すると資金が降ってくる“錬金術”』ではない」という事である。無論プロジェクトが成功すれば得られるものは大きい。それは金銭的なものに留まらず、プロジェクト立ち上げにあたって改めて行われる自館の現状に対する検討や、寄附金獲得の過程で支援者からの応援メッセージなども含む。だが、成功の為に必要な事は決して少なくない。自館の特徴や窮状、ブランドイメージ等を検討した上で、人的・時間的にそれなりのリソースを注いで初めてプロジェクトが成立するのである。

注目度の高さから考えれば、大学図書館でのCF活用事例は今後増加するだろう。もし読者の中に現在、あるいは今後、自館でのCF活用を検討されている方がいらっしゃるなら、上記のような点にご留意頂ければ筆者としては幸いである。

参考

[1] READYFOR. “クラウドファンディング-Readyfor”. https://readyfor.jp/, (参照 2017-05-31).

[2] READYFOR. “READYFORと筑波大学が寄附金・研究費獲得を目的とした業務提携を開始”. https://readyfor.jp/corp/news/36, (参照 2017-05-31).

[3] READYFOR. “資料費減少で危機。大学図書館に本を購入し若者に十分な学ぶ場を”. https://readyfor.jp/projects/tsukubauniv-lib, (参照 2017-06-06).

（まつの・わたる／筑波大学附属図書館）